様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 23 日現在

機関番号：23903
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2010
課題番号：21792268
研究課題名（和文）　障害児をもつ親の育児ストレスと養育態度の関連～父親と母親の比較～
研究課題名（英文）　Relationship between childrearing stress and nurturing attitude in parents of children with disabilities　-Comparison of fathers and mothers

研究代表者
大塚　景子（OTSUKA KEIKO）
名古屋市立大学・看護学部・助教
研究者番号：40457932

研究成果の概要（和文）：
障害児とくに早期療育に通う子どもをもつ両親の育児ストレスに関連する要因を明らかにすることを目的に調査を行った。その結果、育児ストレスの関連要因として、父親は「家族の協力の有無」「療育通園期間」、母親は「年齢」「療育通園期間」「子どもと接する時間」「育児の楽しさ」が有意に関連しており、父母で育児ストレスに関連する要因が異なることが明らかになった。そのため、育児ストレスに対する支援を検討する際は、父母それぞれに対応した支援を考えていく必要があることが示唆された。
研究成果の概要（英文）：
A survey was conducted to clarify the factors related to childrearing stress in parents of children with disabilities, especially those who go to early remedial teaching. The results showed that factors significantly related to childrearing stress in fathers were “presence or absence of cooperation from family” and “commuting time to remedial teaching.” In mothers, the factors were “age,” “commuting time to remedial teaching,” “time in contact with child,” and “joy of childrearing.” The factors related to stress were thus shown to be different in fathers and mothers. This suggests that when investigating support measures for childrearing stress, it is necessary to consider support corresponding respectively to fathers and mothers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：看護学、ストレス、障害児、発達障害、早期療育、育児、両親

１．研究開始当初の背景

これまでに、健常児の母親の育児ストレスについては多くの研究がされている。先行研究では、育児ストレスが出生順位や家族構成、就業状況、子どもの発達と関連していることが明らかになっている（三国ら、2003、寺本ら、2008）。育児ストレスは重要な虐待要因であることが指摘されており、育児ストレスが高い母親は子どもが良いことをした時、抱きしめるといった愛着行動をとることが少ないことも示されている（北村ら、2006）。こうしたことから、育児ストレスは養育行動と関連し、児童虐待の要因となることが示されている。近年では父親と母親の育児ストレ

スを比較した研究もされてきており、両親の育児ストレス得点の比較では、父親よりも母親の方が育児ストレスを強く感じていた。また、父母の育児ストレス得点に正の相関がみられ、どちらかの親が強いストレスを感じている場合、もう一方の親もストレスを強く感じる傾向があることが指摘されている（三国ら、2003）。このことから、育児ストレスへの支援は、片方の親のみではなく、両親に対しての支援が必要であることを示唆している。

障害児をもつ親の育児ストレスは健常児の親よりも高いことが多く報告されており、障害児の親は日常の育児において様々なストレスを抱えていると考えられる。

障害児の発達において早期発見・早期療育が重要であることは数多く報告されている。しかし、療育に通っている児の中でも、実際に早期療育を受けている就園前の児の親を対象とした育児ストレス研究はほとんど見当たらない。早期療育を受けている児は年齢が低く、発達の問題や障害を指摘されてからの経過も短いため、親は精神的に不安定でストレスを強く感じていることが考えられる。家族支援を検討する上でも、このような親の育児ストレスを明らかにすることが必要であると考えられるため、障害児の中でも早期療育に通う児をもつ親に注目し、検討した。

２．研究の目的

本研究では、障害児とくに早期療育に通う子どもをもつ両親の育児ストレスに関連する要因を明らかにし、今後の家族支援のための参考資料とすることを目的とする。

３．研究の方法

(1) 対象者：Ａ県内の療育施設早期療育グループに通う子どもをもつ両親

(2) 調査期間：平成 21 年 6 月から 11 月

(3) 調査方法：調査方法は無記名自記式質問紙調査で、施設側から許可が得られた早期療育グループに対して行った。本調査の前に、過去に早期療育に通っていた子どもをもつ両親を含めた 3 組の父母にプレテストを行い、本調査を行った。調査の際は、実際に著者が早期療育グループに参加した後、親に対して研究目的・方法を文書と口頭で説明し、口頭で同意が得られた場合に質問紙を配付し、翌週の通園時に施設に設置した回収箱または郵送で回収した。もう一方の親には説明を受けた親に依頼し、同様に回収した。

(4) 調査内容：①基本属性；親の要因として、年齢、子どもの人数、同居家族、家事育児に対する家族からの協力の有無、家事育児に対する協力が最も得られる家族、仕事の有無、早期療育の通園の付き添者、子どもの要因として、早期療育に通園している子どもの年齢、性別、出生順位、早期療育の通園期間、②養育態度（育児に対する姿勢）；1 日に子どもと接する時間、育児の楽しさ、地域活動（育児サークルや親の会など）への参加の有無、③療育への思い（療育の必要性への思い）、④育児ストレス（日本版 PSI）である。

(5) 分析方法：育児ストレス（総得点、親側面の得点、子ども側面の得点）と親の要因、子どもの要因、養育態度（育児に対する姿勢）、療育への思いとの関連については Mann-Whitney の U 検定を行った。統計的有意水準は 5%未満とし、10%未満のものは傾向ありとした。分析には SPSS Ver.17.0 を使用した。

(6) 倫理的配慮：調査は、名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会の承認を得てから実施した。調査に際して、施設長および発達相談部部長に研究協力の依頼を行い、研究目的・方法を文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。研究協力者には研究の目的・方法を文書と口頭で説明し、口頭で同意を得た後、同意を得た人に対して質問紙を配付した。質問紙には回収をもって同意の旨を明記した。また、調査への参加は自由意志であり、参加拒否の場合にも不利益を被ることがないこと、プライバシーの保護には万全を期することを十分に説明した上で実施した。なお、研究協力者に対しては、研究者や施設の強制力が働かないよう慎重に説明し、調査を進めた。

４．研究成果

(1) 基本属性：Ａ県内の療育施設の早期療育グループに通う子どもをもつ父親と母親 63 組のうち、23 組（回収率 36.5%）について夫婦で回答が得られた。1 組については父親の育児ストレスの回答に欠損が多かったため、育児ストレスを使用した分析からは除外した。また、父親のみからの回答が 1 名、母親のみからの回答が 4 名であったことから、父親 24 名（回収率 38.1%）、母親 27 名（回収率 42.9%）、子どもや家族に関する基本属性の回答は 28 名から得られた。基本属性については表 1 の通りである。

表1　基本属性

		N		Mean±SD	人(%)
年齢(歳)	父親	24		36.6±5.5	
	母親	27		34.3±4.1	
子どもの人数(人)		28		1.6±0.8	
療育に通う子どもの年齢(歳)		28		2.5±0.7	
療育に通う子どもの性別		28	男児		18(64.3)
			女児		10(35.7)
療育に通う子どもの出生順位		28	第1子		21(75.0)
			第2子		3(10.7)
			第3子		3(10.7)
			第4子		1(3.6)
療育通園期間(月)		28		8.3±5.5	
療育への付き添い		28	母親		28(100)
家族構成		28	核家族		25(89.3)
			拡大家族		3(10.7)
家族の協力		28	非常に得られている		7(25.0)
			得られている		18(64.3)
			あまり得られていない		3(10.7)
			全く得られていない		0(0)
仕事の有無	父親	24	有職		24(100)
			無職		0(0)
	母親	27	有職		4(14.8)
			無職		23(85.2)

(2) 養育態度（育児に対する姿勢）・療育への思い・育児ストレスの実態（表 2～表 4）：早期療育に通う子どもをもつ親は、子どもと接する時間、地域活動の参加、療育への思い、育児ストレスは母親の方が多く、育児の楽しさは父親の方が楽しいと感じていることが明らかになった。1 日に子どもと接する平均時間は、父親 2.9±2.1 時間、母親 16.1±7.5 時間で母親の方が有意に長い時間子どもと接しており、先行研究とほぼ同様の結果であった。育児の楽しさでは、母親に「あまり楽しくない」と回答した人が多く、平均点からも父親の方が育児を楽しいと感じていた。地域活動への参加では、父親はほとんど参加しておらず、平均点からも母親の方が参加していた。育児サークルや親の会の多くは平日の昼間に行われており、仕事をしている父親にとっては物理的に参加することが困難であると考えられる。

表2　育児に対する姿勢の父母の比較　人(%)

		父親N=24	母親N=27	
子どもと接する時間	1時間未満	2(8.3)	0(0)	
	1～3時間未満	8(33.3)	1(3.7)	
	3～10時間未満	13(54.2)	5(18.5)	
	10時間以上	1(4.2)	21(77.8)	
	Mean±SD(時間)	2.9±2.1	16.1±7.5	**
育児の楽しさ	非常に楽しい	6(25.0)	2(7.4)	
	楽しい	17(70.8)	19(70.4)	
	あまり楽しくない	1(4.2)	6(22.2)	
	全く楽しくない	0(0)	0(0)	
	Mean±SD(点)※1	1.8±0.5	2.2±0.5	*
地域活動への参加	非常に参加している	0(0)	0(0)	
	時々参加している	2(8.3)	10(37.0)	
	あまり参加していない	4(16.7)	3(11.1)	
	全く参加していない	18(75.0)	14(51.9)	
	Mean±SD(点)※2	3.7±0.6	3.2±0.9	*

Mann-Whitney U検定　*p<0.05　**p<0.01
※1　1点(非常に楽しい)～4点(全く楽しくない)
※2　1点(非常に参加している)～4点(全く参加していない)

両親の療育への思いでは、療育への思いの平均得点は父親 2.0±0.7 点、母親 1.6±0.6 点で母親の方が有意に療育への思いについての得点が低く（p<0.05）、父親より母親の方が療育が必要であると思っていた。本研究では、療育の通園の付き添いは全員が母親であったことからも、父親が療育に参加する機会が限られて児の状況が分からず療育が必要でないと思うことが推測される。

表3　療育への思いの父母の比較　人(%)

		父親N=24	母親N=27	
療育の必要性への思い	非常に必要だと思う	6(25.0)	14(51.9)	
	必要だと思う	13(54.2)	11(40.7)	
	あまり必要ないと思う	5(20.8)	2(7.4)	
	全く必要ないと思う	0(0)	0(0)	
	Mean±SD(点)※	2.0±0.7	1.6±0.6	*

Mann-Whitney U検定　*p<0.05
※　1点(非常に必要だと思う)～4点(全く必要ないと思う)

育児ストレスの父母の比較では、「総得点」は父親 199.7±33.9 点、母親 218.6±35.4 点で母親の方が有意に得点が高く（p<0.05）、母親のストレスの方が高かった。「親側面のストレス」については、父親 98.7±21.8 点、母親 117.1±20.8 点で有意に母親の得点が高く（p<0.01）、母親の方がストレスを感じていた。母親の方が「総得点」、「親側面のストレス」が高いという結果は、先行研究の健常児の親と同様のであった。

父母の育児ストレス得点を先行研究の健常児の父母の得点と比較すると、父母ともに「総得点」、「子ども側面のストレス」、「親側面のストレス」において本研究の対象者の方が得点が高く、育児ストレスが高かった。

表4　育児ストレスの父母の比較

日本版PSI	父親N=23 平均値	母親N=27 平均値
総得点（C1～C7・P1～P8の和）	199.7±33.9	218.6±35.4 *
子ども側面のストレス（C1～C7の和	101.0±15.5	101.4±17.2
親側面のストレス（P1～P8の和）	98.7±21.8	117.1±20.8 **

Mann-Whitney U検定　†p<0.1　*p<0.05　**p<0.01

(3) 親の要因と育児ストレスとの関連（表5）：父親は家族への協力をしている人、母親は年齢が高い人にストレスが高いことが明らかになった。父親において実際に家事育児の協力をしている「協力あり」の育児ストレス得点が「総得点」（p<0.01）、「子ども側面のストレス」（p<0.1）、「親側面のストレス」（p<0.01）全てにおいて高かった。父親の育児ストレスの特徴として、育児をやっても母親に認めてもらえないことに対する不満やむなしさを抱くことが指摘されていることから（清水、2006）、早期療育に通う児の親においても、父親は家事育児に協力していても認められないことから育児ストレスが高くなっていることが考えられる。母親において育児ストレスとの関連で有意差がみられたものは年齢であり、「40 歳以上」の方が育児ストレス得点が「総得点」（p<0.05）、「子ども側面のストレス」（p<0.1）、「親側面のストレス」（p<0.05）全てにおいて高かった。先行研究でも年齢が高い母親に育児ストレスが高いことが報告されている（村上ら、2005）。早期療育に通う子どもは障害を抱えていたり、発達上の問題が生じていることから理想と現実との違いが健常児よりも生じやすく、ADHD など子どもの活動が多い場合は、健常児以上に育児に体力が必要となることが予測される。母親の年齢が高い場合は、若い母親よりも身体的な疲労が考えられる。さらに、身体的な疲労は精神的な疲労にもつながることから、身体的疲労の回復に努めることが必要である。

表5　親の要因と育児ストレスとの関連

			父親N=23		母親N=27	
			日本版PSI（平均値）			
			総得点	子ども側面	親側面	
年齢	父親	39歳以下(n=20)	200.2	101	99.3	
		40歳以上(n=3)	196	101	95	
	母親	39歳以下(n=22)	211.9	98.8	113.1	
		40歳以上(n=5)	247.8	113.2	134.6	
			*	†	*	
子どもの人数	父親	1人(n=13)	194.5	100.2	94.3	
		2人以上(n=10)	206.4	102	104.4	
	母親	1人(n=14)	227	105.3	121.7	
		2人以上(n=13)	209.5	97.3	112.2	
家族構成	父親	核家族(n=21)	197.2	99.6	97.7	
		拡大家族(n=2)	225	115.5	109.5	
	母親	核家族(n=24)	221.3	102	119.2	
		拡大家族(n=3)	197	96.7	100.3	
家族の協力の有無	父親	協力あり(n=20)	206.7	103	103.8	
		協力なし(n=3)	152.7	87.7	65	
	母親	協力あり(n=24)	217.4	101	116.3	
		協力なし(n=3)	228	104.7	123.3	
			**	†	**	

Mann-Whitney U検定　†p<0.1　*p<0.05　**p<0.01

(4) 子どもの要因と育児ストレスとの関連（表6）：父母ともに療育通園期間と関連があることが明らかになった。父親は、療育通園期間において「子ども側面のストレス」が「6か月未満」の人で高い傾向（p<0.1）であった。父親の場合、療育に通い始めてからの期間が浅い時期は、まだ子どもの発達に関する特徴を捉えることができず、うまく対応できないことが予測され、子どもと接することでストレスが生じると考えられる。母親においても療育通園期間で有意差があり、「親側面のストレス」が「6 か月以上」の人で高かった（p<0.05）。母親の場合、時間が経つにつれて他児との比較などから自責の念や親としての有能さといった母親自身の問題でストレスが生じてくる可能性が考えられる。

表6　子どもの要因と育児ストレスとの関連

			父親N=23		母親N=27	
			日本版PSI（平均値）			
			総得点	子ども側面	親側面	
年齢	父親	2歳以下(n=8)	198.3	99.6	98.6	
		3歳以上(n=15)	200.4	101.7	98.7	
	母親	2歳以下(n=11)	225.8	103.8	122	
		3歳以上(n=16)	213.6	99.8	113.8	
療育に通う子どもの性別	父親	男(n=16)	203.3	102.4	100.9	
		女(n=7)	191.3	97.7	93.6	
	母親	男(n=17)	221.1	103.4	117.7	
		女(n=10)	214.2	98.1	116.1	
療育に通う子どもの出生順位	父親	第1子(n=17)	201.9	102.1	99.9	
		第2子以降(n=6)	193.2	97.8	95.3	
	母親	第1子(n=20)	221.2	102.1	119.1	
		第2子以降(n=7)	211.1	99.6	111.6	
療育通園期間（月）	父親	6ヶ月未満(n=10)	206.6	106.7	99.9	
		6ヶ月以上(n=13)	194.3	96.5	97.8	
	母親	6ヶ月未満(n=12)	211.6	101.9	109.7	
		6ヶ月以上(n=15)	224.1	101.1	123.1	
				†	*	

Mann-Whitney U検定　†p<0.1　*p<0.05　**p<0.01

(5) 養育態度（育児に対する姿勢）と育児ストレスとの関連（表7）：父親の育児ストレスとの関連はいずれもなかったが、母親において育児ストレスとの関連で有意差がみられたものは、子どもと接する時間、育児の楽しさであった。子どもと接する時間では「16 時間未満」の方が「子ども側面のストレス」が高い傾向であった（p<0.1）。先行研究では、父親よりも母親の方がストレスが高い要因として子どもと接する時間が母親の方が多いことをあげている（三国ら、2003）。本研究においても、子どもと接する時間が長いほど育児ストレスが高いと考えていたが、子どもと接する時間が短い方が「子ども側面のストレス」が高い傾向であった。これは、育児ストレスが高いからこそ子どもと接する時間が短いことも考えられる。育児の楽しさとの関連では、「楽しくない」人の方が「総得点」（p<0.05）、「子ども側面のストレス」（p<0.1）、「親側面のストレス」（p<0.05）

いずれにおいても得点が高かった。育児の楽しさは、子どもの反応や子どもに対する愛着などさまざまな要因が関連すると考えられ、楽しいと思えず育児ストレスが高い場合は、多くの支援を必要としている可能性が高い。早期療育に通う児の親の場合、子どもの発達の理解や障害の受容の精神的ストレスのみならず通園など身体的にもストレスが生じやすいと考えられる。育児の楽しさを実感することで子どもへの愛着が育ち子どもの発達を理解したり、障害を受容したりできる状況につながることが考えられるため、子どもの日々の成長を母親が喜びとして実感できるような働きかけが必要であると考えられる。また、「楽しくない」と回答した人の育児ストレスは、非常に高いため、虐待につながる可能性も考えられることから早急に支援が必要であると考えられる。

表7　育児に対する姿勢と育児ストレスとの関連

			父親N=23		母親N=27	
			日本版PSI(平均値)			
			総得点	子ども側面	親側面	
子どもと接する時間	父親	3時間未満(n=9)	191.7	101.4	90.2	
		3時間以上(n=14)	204.8	100.6	104.1	
	母親	16時間未満(n=14)	228.6	107.1 †	121.5	
		16時間以上(n=13)	207.7	95.3	112.4	
育児の楽しさ	父親	楽しい(n=22)	199.8	101.6	98.3	
		楽しくない(n=1)	196	88	108	
	母親	楽しい(n=21)	210.5 *	98 †	112.5	*
		楽しくない(n=6)	246.8	113.5	133.3	
地域活動への参加	父親	参加有り(n=2)	202	109.5	92.5	
		参加なし(n=21)	199.4	100.1	99.3	
	母親	参加有り(n=10)	223.5	103.2	120.3	
		参加なし(n=17)	215.7	100.4	115.2	

Mann-Whitney U検定　†p<0.1 *p<0.05 **p<0.01

(6) 療育への思いと育児ストレスとの関連（表8）：父親における療育への思いと育児ストレスとの関連では、「子ども側面のストレス」で「必要」が103.2点、「必要ではない」が93.0点で「必要」の方が得点が高く、ストレスが高い傾向であった（p<0.1）。母親では、「親側面のストレス」で「必要」が119.0点、「必要ではない」が93.0点で「必要」の方が得点が高く、ストレスが高い傾向であった（p<0.1）。療育が必要であると思っている親において、必要でないと思っている親よりも、父親では「子ども側面のストレス」、母親では「親側面のストレス」が高いという父母の特徴が明らかになった。これは、育児に真剣に向き合うことで子どもの発達の問題を感じ、療育が必要であると思うとともに育児ストレスを抱えていると考えられる。

表8　療育への思いと育児ストレスとの関連

			父親N=23		母親N=27	
			日本版PSI(平均値)			
			総得点	子ども側面	親側面	
療育への思い	父親	必要(n=18)	203.5	103.2 †	100.3	
		必要ではない(n=5)	185.8	93	92.8	
	母親	必要(n=25)	221.4	102.3	119	†
		必要ではない(n=2)	183.5	90.5	93	

Mann-Whitney U検定　†p<0.1 *p<0.05 **p<0.01

日本では母親が中心となって育児をする傾向が強いことから日本の母親は欧米に比べて育児ストレスが高いといわれている。しかし、近年では日本においても父親の育児参加が注目され、育児は夫婦でするという意識が増してきている。早期療育に通う子どもをもつ場合、健常児よりも育児が大変であることなどから二人で育てているという意識は特に重要であると考えられる。本研究では、育児ストレスに関連する要因が父母で異なることが明らかになった。そのため、育児ストレスに対する支援を検討する際は、父母それぞれに対応した支援を考えていく必要があることが示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

①大塚　景子、堀田法子、早期療育に通う子どもをもつ両親の療育への思いと育児ストレス、第57回日本小児保健学会、2010.9.18、朱鷺メッセ（新潟県）.

６．研究組織

(1)研究代表者

大塚　景子（OTSUKA KEIKO）
名古屋市立大学・看護学部・助教
研究者番号：40457932